



高野ムツ才選

暮れてなほ人影ひとつ雪下し

平塚市 原 道雄
【評】豪雪地帯、黙々雪下ろしに精を出す。今夜はまた雪降り。危険は承知だが、なんとしても今日中に済ませなくてはならない。雪国の厳しさが「なほ」にこもる。
全面へ日のわたりたる白障子

越谷市 小林ゆきお
【評】何枚並んでいるのだろうか。広い座敷の白障子。次第に日が差してきて、やがて全体に及ぶ。紙とは思えない張り詰めた力がみなぎる。雪晴や越えて来し尾根越ゆる尾根

大阪市 今井 文雄
【評】吹雪の一夜を山小屋で過ごした早朝。来し方に昨日越えた尾根が見え、行手には踏破予定の尾根が見える。これぞ冬山登山の醍醐味。鈴緒編む指に力や冬日差

白河市 円谷 淑子
農機具市おまけのやうに野菜売る
山武市 川島 隆
嬉しいと涙すく出る日なたほこ
橋本市 若崎 喬子

久喜市 深沢ふさ江
霜晴や墓中のきみと乾杯す
鹿嶋市 津田 正義
煉炭に手翳し頃は詰襟で

東京都 山口 照男
晩学は余生の総て若菜摘む
川崎市 沼田 広美

正木ゆう子選

少年の日の焚火たた火を欲す

東村山市 鈴木 忠
【評】読むときは五・二・三・二・五と切るが、意味上の切れは七・三・七。全体の構成としては十・七の二フレーズから成る。その複雑さが、思春期の心情をよく表している。浜ごんと炎の角となりけり

茅ヶ崎市 原田 博之
【評】炎も角も先が尖っている。角にはやや曲がっているイメージもある。炎は風に吹かれてはいるか。「浜」の一字で、風景が広がる。冬桜白をちりばめ路地の奥

吹田市 前田 尚夫
【評】遠くから見る冬桜は、花というより、小さな白いものを枝にちりばめたようだ。何だろうと、入ったことのない路地へ入ってゆく。編み初めし毛糸のような十一歳

松江市 三方 元
確かにが口癖の子の初メール
京都市 根来 滋
仰ぎみる山の一村冬の屋

高知市 加田 紗智
干し鮫とするめを添へて餅配る
大東市 堀 志泉
寸評の寸鉄を帯ぶ初句会

東京都 望月 清彦
蒲の穂の爆発無音朝の池
武蔵野市 大谷由美子
初電車止まり遠富士止まりたる
町田市 枝沢 聖文

小澤 實選

闇に浮かぶあまたの目あり寒施行

川崎市 西 順子
【評】「寒施行」は寒中、狐や狸に小豆飯や油揚げなどたべものを施すこと。あまたの目は狐や狸のものなのだろう。それら動物の強い飢えを光っている目の数に感じるのだ。自転車籠に手袋のもう片方

福原市 佐藤 雅之
【評】所在がわからなかった片方の手袋が自転車の籠の中にあつた。破調の独特のリズムが、その不安から安堵への変化を感じさせる。コンビニ珈琲「ホット」「スマール」でも「濃目」

東京都 森 一平
【評】この句によると、コンビニで珈琲を買おうとすると、細かな指定ができるらしい。具体的に三つの指定を示したのが楽しい。煤逃やラーメン店の肉増し増し

船橋市 たなか里
グランドをトンボで均し春を待つ
つくば市 浅田 三秋
足入れて猫蹴飛ばせる炬燵かな

東京都 池野 宗子
湯の帰り振ればタオルの凍て立つ
神戸市 音羽 和俊
冬晴れやモルック競ふ声高く

三田市 依藤あかね
死を畏る細き水柱に融れてゐて
加古川市 石村 まい
雪掻きのスコップの音目覚めたり
横浜市 鈴木 基之

津川絵理子選

里神楽須佐之男屋は牛を飼ふ

四街道市 須崎 輝男
【評】地域で暮している人が演じる里神楽。須佐之男命役は普段は牛の飼育を生業としているのだ。何となく穏やかな人柄ではないかと思わせ、荒ぶる神とのギャップが面白い。豆撒や通りすがりの鬼になり

東大阪市 西川 賢子
【評】たまたま近くを通りかかって自分の豆を打たれたのだろう。打たれたついでに鬼になりきって。賑やかで楽しい豆撒きの光景だ。コンビニのおにぎり旨し冬の夜

東京都 山田真理子
【評】コンビニのおにぎりは冷たいが、それも旨し。意外性にハッとさせられる。冬の夜と合わせると「旨し」に複雑な感情が読み取れる。鴛鴦を撮りて未婚をたのしめり

相模原市 芝岡 友衛
板張りのべたべたしたり薬喰
朝倉市 深町 明
大枯野縄文人の声を聴く

大船渡市 富谷 英雄
日脚伸びゆつくり走る教習車
日立市 菊池 三夫
床の間に婚の目録春隣

町田市 谷川 治
新聞に一句ありきと初便り
横浜市 飯山 稔子
割箸を持つてうらうら正月
仙台市 松岡 三男

俳句あれこれ 藤田直子(俳人)

白陽と鶴

鹿兒島県では鶴の北帰行が始まっているという。△引鶴の日和待ちなる風の中▽は当地に住む竹下白陽氏の作。北へ帰る鶴が風に吹かれつつ、日和を待っているという句である。シベリアから飛来する鍋鶴や真鶴が一羽羽以上も越冬する出水平野。氏は親子鶴が餌を啄む姿や群れて空を舞う壮麗な光景を長年詠んできた。△降り鶴の己が影踏みつと跳ぬる▽△発ちたるは去ぬる鶴かも矢の疾さ▽と写実的な表現を心がける。さらに一昨年八天地に鶴の声ある響けさよ▽と大きく捉えた句で「鶴の町いずみ全国俳句大会」の大賞に輝いた。鶴との出会いに感謝し、これからも自然の運行が違わず巡り来ることを祈る心が生んだ句と言えよう。



題字デザイン・イラスト 福田美蘭